

福岡気功の会 会報『ゆ一き』  
アーカイブス 6

# 紀 行

## CONTENTS

- |                 |           |
|-----------------|-----------|
| 1 玄界灘を船で渡った旅のメモ | 48-950122 |
| 13 毒のまわった共産中国にて | 53-961124 |
| 18 亀蛇を見てきた      | 54-970118 |
| 19 亀蛇はどこから来たか   | 72-991217 |

2016.7.22 uped

# 玄界灘を船で渡った旅のメモ

山 部 嘉 彦

## 1. 気脈の会をなぜ韓国で？

去年11月の気脈の会合宿に、中国の周穂豊老師と韓国の崔成鉉さんが招かれた。奇しくも日韓中極東三国の気の合作となった。もしこのとき、崔成鉉(チョンヒヨン)さんがスピョクチギを演じてくれなからたら、今回の交流にそれは登場しなかっただろう。去年私は参加したのだけれど所用があつて、最終日の早朝、早退して崔さんのスピョクチギを見損なつたので、今回じかに出会えて私は、わざわざ行った甲斐があったと思った。

気脈の会をなぜ韓国で？と聞かれて私は口籠もる。私には手掛かりがない。自然学校のことは聞いてはいたが、いま一つ引っ掛からなかつた。それでも行つたのは気脈の会のことは大事にしたいと思っているからである。

## 2. スタンスの取り方

日韓両国民は嘆かわしいいさかいの百年の歴史を共有しているだけにもともとスタンスの取り方が難しいのだ。それを置いといて、というためにはよほどの個人的な信頼関係がなければならないと思う。どんなに高邁な理想によろうと、あるいはどんな緊急避難的事情があろうと（事実として高邁な理想によらず緊急避難的状況でもなかつたことは今更言うまでもないが）他人の家に土足で上がり込んで荒し回っておきながら、もう50年も前に撤収したのだからそのことには触れないでおいて、これから先は仲良くやりましょう、とはいかないだろう。仮に韓国がそういってくれても、日本は、いやオレたちが悪かったんだから、せめて罪滅ぼしをさせてもらいたい、というのが人倫というものだと私は思つてきた。

幸運一といるべきだつう一にも、私にはある在日韓国人と社会的行動をともにするチャンスがあつて、どうやらここには日韓関係問題や韓国人差別問題があるのではなくて、ただ日本人問題だけがあるのだとわかつた。かれこれ20年前のことである。それから私が誰に対しても全く自由に自分の考えを主張することのできる立場—コスモポリタンとして生きるみちーを見つけるまでそんなに時間がかからなかつたが、韓国に行くチャンスはなかなか訪れなかつた。例えば釜山なら、新幹線で大阪に行って来るより安くつくのに、この海が越えがたかったのだ。

ところが去年、中3だった息子がなんと修学旅行で、あっさりとこの海を越えちま

いやがった。聞けばいっときの自由時間もなく、一言の韓国語も話さなかったんだと。もちろん博多の町に住む在日韓国人に話を聞くなどの気の利いた準備もしていない。あっさり、というよりこりゃただのノーテンキだわな。どこが修学なんだ？

### 3. 用意周到な歓待

吉田昭子先生が、来年は韓国で、と提案されたとき、私はすいぶんお気軽にそうおっしゃいますけどねえ、という気持ちがあった。ところが彼女、実は3歳から17歳の身空までなんと朝鮮に住んでいたというではありませんか。私にとって戦前は架空のもの、と言ってまずければ観念的なものだ。しかし彼女にとって戦前戦中は人生の決定的な部分であり、かつ歴史の中に実在した具体的なものだ。人生と歴史を睨み合わせて整理するのはたいへんな作業だったろうと思う。

彼女が『気脈の会韓国合宿』を実現させるために、並みでない苦労を買って出た裏打ちの心がけを私はわかった気がした。彼女も、単に『自然学校』の人たちと連帯したいというだけでそこに行ったのではなかったのだ。彼女も、言ったのは、鳥谷部トシさんとか、私も、だからだ。

李承晚(イソンマ)の時代はもちろん、朴正熙(パクチョンヒ)の時代になっても韓国は日本に対しては反日恨日で通してきたが、ソウルオリンピックで変わったと聞いた。彼らに自信と余裕が生まれたのだ。金在哲(キムサチョル)さん宅での自己紹介で私は「自分の日韓」をちょっと語った。するとそのあとで通訳の鄭直相(チヨンジクサ)さんが「氣を悪くされるかもしれません、今回は韓日については話題にしないことにしよう、と前もって話し合って決めたので…」と了解を求めてきた。私は彼らの余裕とここから始まる交流への期待を感じとった。周到である。

前後3日間、彼らは心を込めて歓待してくださった。まずお互いを知り合い、仲良くなってしまうこと、お互いの好ましいところに惚れてしまうこと。それが交流の基礎であることを彼らは経験を通して確信にまで高めていたのに違ひなかった。

私たちは彼らほど共通の理念によって結ばれているわけではなかったので、漫然と光州(クワソジュ)で合流し、日韓の歴史については何ほどの共通認識もなく、ただ自然学校に何ほどの興味と関心と好感を抱いている程度のことだったから、私は一本取られたなと思った。

余談だが、鄭さんのあと、数人の人が私のところにやって来て、「私はあなたの考えに賛成だが、今回は…」と話しかけてきた。私は「自分の日韓」を敢えて話して良かったのだと思った。中でも学究肌の李元衍(イウォンヨン)さんは、コスモポリタンとしての自覚がこれからの時代を拓くんだ、しかしあいらはまごうことなき韓国人だぜ、という意味のことを言って、私と意気投合した。

#### 4. もうひとりの鄭さん

翌朝、私たちは通訳の鄭さんとは別人同姓の鄭錫辰(チョンソックソン)さんにスピョクチギの基本功を習った。自然学校の人たちは日本の気功のグループと交流するにあたって、多分こちらからの希望もあってのことだろうが、本格的なスピョクチギを紹介しようと彼に頼んだに違いなかった。彼は前の晩の自己紹介の時から、陽気に振る舞うひとなつっこい他の人たちとは全然ちがっていた。彼だけが静かで穏やかでありながら毅然としていたのだ。「短い時間の中で、どうやってスピョクチギを説明しようかとさっきから考えていました。」と彼。目の前にいるのは気功の練功家たちである。いい加減なことを言って、スピョクチギを軽く見られてはならない。本質的なことを的確に語らねばならない(と顔に書いてあった)。

彼はことばを選びながら、スピョクチギとは、生まれながらの自分の、あるいは人間の意識と能力を超越して宇宙自然の法則に則った実存へと昇華していく「武芸」なのである、と言った。短いレッスンのあと、彼は私に語りかけてきた。「気功をすると超能力が得られるか。誰でも使えるようになるか。自分のまわりにも気功をする人たちがいるが、その人たちは自分の健康のためや家族や自分とかかわりのある人びとと仲良く穏やかに暮らすためにしているのだという。あなたの考えを聞かせてください。」と。

私はスピョクチギの印象と気功に取り組む自分の立場や目標を話し、霊的な力について自分の考えていることを手短かに話した。すると彼は、自分も同じ考え方で気功についてもっとよく知りたいと思う、と言い、これからぜひ交流していきましょうということになった。

彼は全羅南道(チヨムナムド)の光州に程近い村に住んでいるので、すぐ近くというわけではないが、来年、私は彼を福岡に招こうと思っている。

#### 5. 気場にこだわる

スピョクチギ(수벽치기)。手は手入、臂は壁ヨク、杖は杖、打ち。拍手のことだ。韓国の伝統的武芸で、多分に宗教的な礼拝の作法や武術の基本的な体捌きが芸術の美意識によって編集されてあって、おごそかさときびしさが滑らかな動きの中に窺われる。

日本人は術としてまとめ、さらに精神性を付与して道としたが、韓国の儒学の伝統の中で育まれたに違いないスピョクチギは、自然の中で自然なる生命として生かされている人間の、天または天帝にたいする敬虔な服従と感謝の心を礼拝の様式としてまとめたものではないかと思う。

私たちが今回習ったのは、「自分の練功に適した場所を見つける」方法、そのプロセスである。鄭さんは開口一番こういった。「(自分にとって)良い気場で練功することは

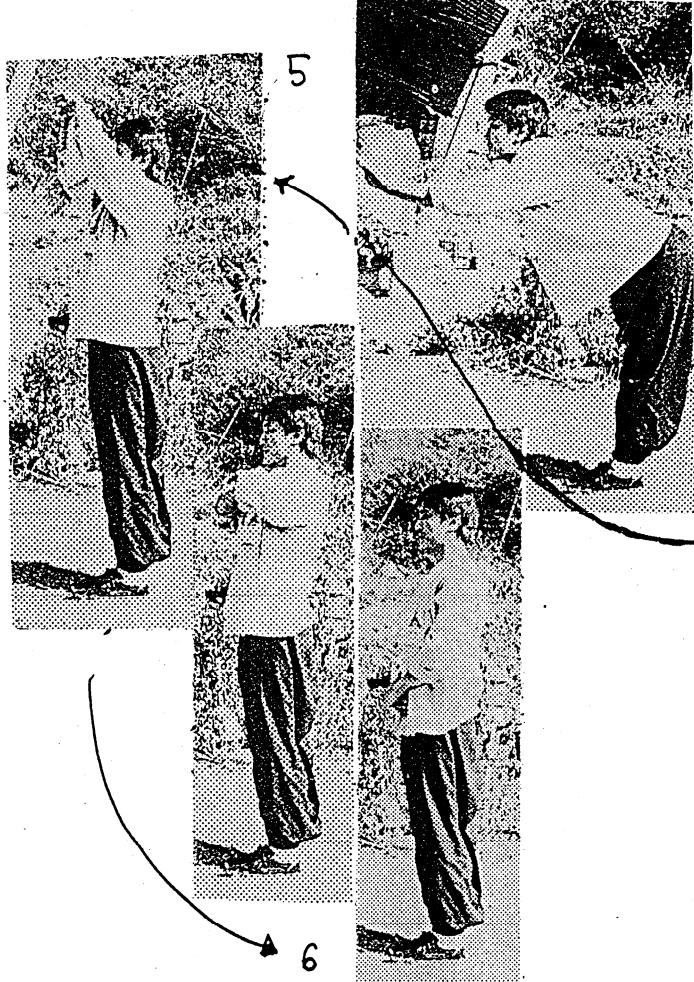
必須の条件である。いくら真剣に、正確に練功しても、この条件を満たさなければ、功を積むことはできない。だから、たとえ多くの月日がかったとしても、最初にこれをすべきなのだ。」と。気功にも気場を重視する立場はあるが、これほど潔癖ではない。焦鉄軍(焦国瑞老師の息子。現在東京在住)が数年前松江に招かれて講習をした時、その会場の気が悪いといって散々悪態について困らせた話は有名だが、東京ではあるビルの地下のスタジオで練功していて平気なのだから、あれは気まぐれなのか、ともあれ練功環境のことは絶対条件ではないと言っている。スピョクチギが練功の気場にこだわるのは、韓国に根づいた風水術の伝統に忠実だからだと断じて差し支えないと思う。

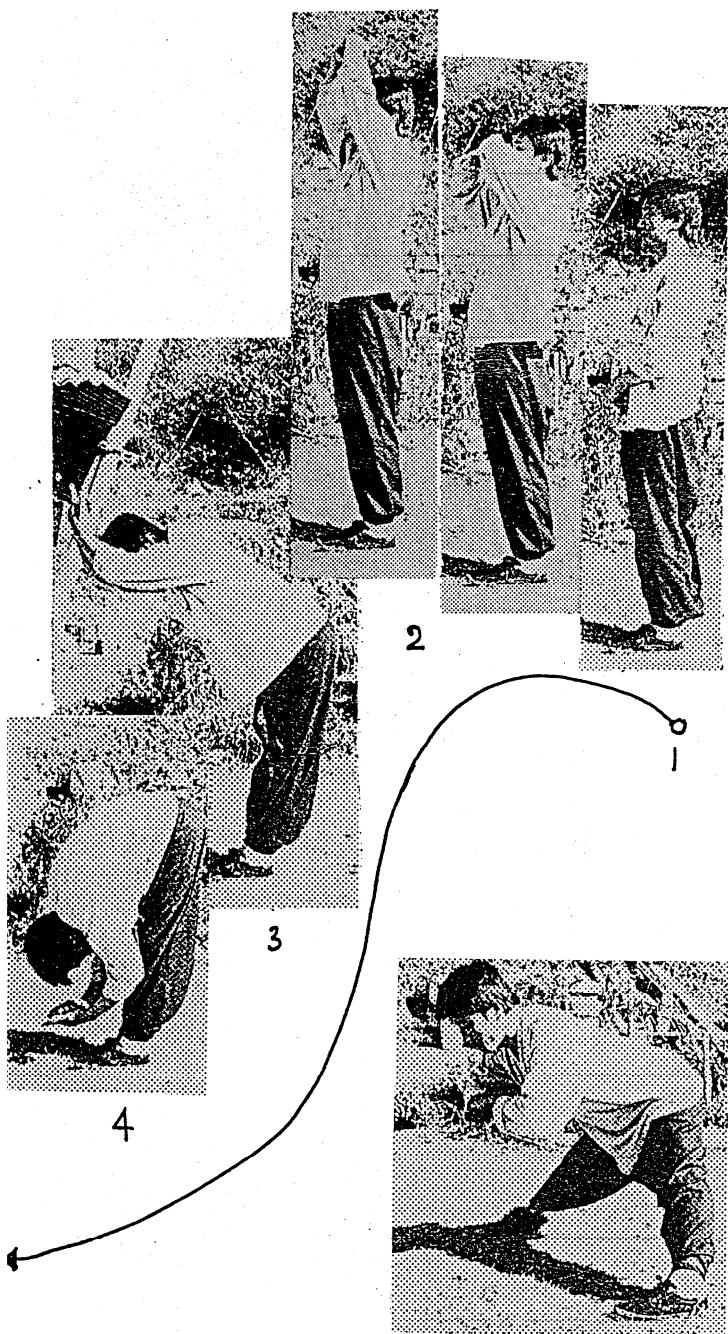
中国気功は、国家の御墨付をいただくのと引換えに、現代社会の風俗や科学的な解釈に妥協して、伝統の持つ規範力に背いた面がある。スピョクチギは韓国でもマイナーな存在なので、伝統を守れているのではないだろうか。

鄭さんは、30坪ほどの金さん宅の庭で、めいめいに自分の気場を探させる前に、前もって気が逃げないように「封印」しておいたから探し当てることができるはず、と言った。ふーん、何か術を使っちゃうのかな。私は興味津々でその説明を聞いたのである。

#### 6. スピョクチギのお辞儀

さてスピョクチギの起式は「礼」で始まる。虎口を開いて両掌を組み、丹田に置いて鎮心。足は並歩。閉脚①。掌を下向きに腋を開け肘を張ってゆっくりと両腕挙上②。肘を前方に寄せ、頭上で両掌組み直し、尻を後ろに引きながら前屈。背筋は伸ばしたまま顔を伏せ、膝の裏を伸ばして上体を倒していく③。深く前屈して、額が膝に近づき、肘が緩んでいながら両掌甲が足背につくほど④。顔を上げ、掌を見ながら上体をゆっくり起こしてくる。両腕は前方にしっかりと伸ばし、背筋は真っ直ぐに保ちながら、再び頭上まで引き上げる⑤。両掌虎口で組み、頸を引き、肘を外に張って掌は下向きとなり、静





### 7. スピョクチギの基本功

続いていくつかの基本功。

- (1)体幹部の左右たおし、後屈、それに捻転。上肢の旋回、手首の捻転。
- (2)歩を進めながら雲手、逆雲手。大きく踏み込んでオーバースローで腕を振

かに顔、喉、胸の前を下ろしてきて丹田に収める⑥。これを3回繰り返す。

動きの速さや滑らかさは、気功の動功と全く同じ。背筋がとことん伸び、胸が開き、腰が緩み、脚の裏が伸びるので、3回繰り返すうちに汗ばむほどである。この「礼」は、練功の最後にも用いられる。

かつて「東方礼儀の国」と讃えられた韓国の伝統に相応しい伝統である。

私のいくつかの教室すでに取り入れている。準備体操の前、最初の最初に行なうのもいいし、站椿功や静坐に入る直前に行なうのもいい。これから始める、という自分自身に対するセレモニーの意味ないと、上半身の脱力と腰のストレッチ、脚の後面のストレッチ、それに背筋伸ばしによる交感神経束への刺激によって全身の弛緩効果を促進するという意味がある。腹式呼吸を動作に協調させればさらに効果は高まり、初発の入静レベルに達する。時間にして3回で3分、短いが濃密。③のとき肩と腕の力をすっかり抜いて上体をぶらさげてしまうとホントに緩んで気持ちがいい。



り出す。

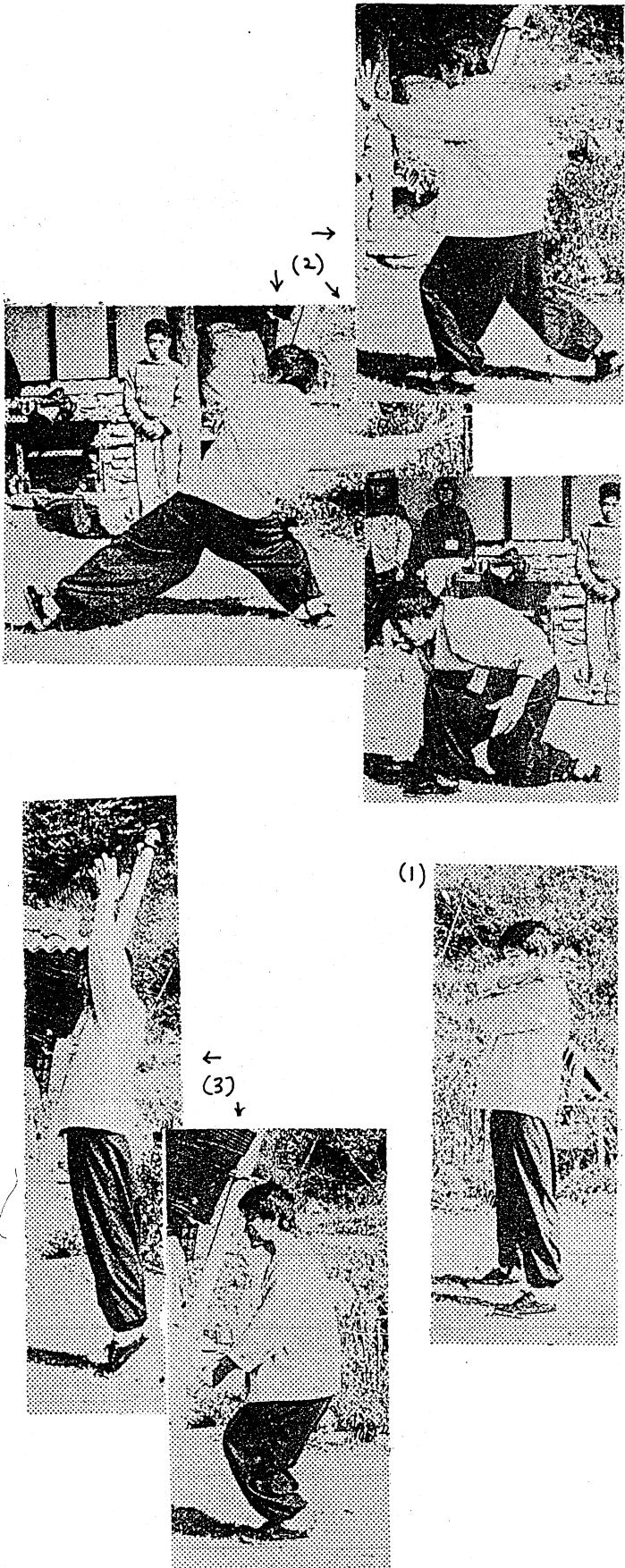
(3)並足、閉脚から両手を外に開き上げてゆき肩の高さで爪先立ちとなり、腕はそのまま挙上し、頭上で柏手(スピヨクチギ)。踵を落として膝をつけたまま折り、その膝の前で柏手(スピヨクチギ)。

(4)並足、閉脚から両手を外に開き上げてゆき肩の高さで掌前向き。左腕固定右腕伸ばしたまま上体を勢いよく左回転して柏手。続いて右で柏手。

(5)両腕肩の高さで開き、掌前向き。体の前面、掌をセンサーとして自分自身が気場方向探知機になり、ゆっくりとおそるおそる、抜き足差し足忍び足であたりをうろつく。完全なる自発功の世界。此処というポイントを見つけたら、今度は静かにゆっくりと一周回するうちに最も良い方角を見つける。

ひととおり体験して分かったことは中国気功とは没交渉ながら、その本質一すなわち見えない世界に対する確信とそれを的確に捉え、操ろうとする主体の陶冶性を高めようとする点一が同じだということである。鄭さんの師匠は25年間の練功歴の持ち主だそうで、弟子入りして長くたっても級も段もないとのことである。ちなみに彼の生業は農業である。

スピヨクチギのすばらしさは、要するに人間としてのたしなみ、敬虔、畏怖心、威儀といったものを中心にして組み立てられてあることである。健康のどこだけつまみ食いしようってできそうにないのがいい。



## 8. 光州の田舎まで

10月半ば過ぎ、ビートルⅡ(博多ー釜山を3時間で結ぶ高速艇)の予約に行ったらもう満席でキャンセル待ちも受け付けられないほどとのこと。あわてて航空会社に尋ねてみると案の定こちらもことごとく満席。これは、行けないかもしれない、と気脈の会の事務局に電話したりして、もしかしたら釜関フェリーか「かめりあ」なら空いてるかも、と祈るような気持ちで電話してみるとこれがガラガラ空き。「かめりあ」というのは、博多ー釜山を15時間半で結ぶ鉛速船。500人あまりを乗せて走る15,000トンの客船である。船中2泊することになるが、ま、いいか。

こうして福岡4人組(山部、牧坂、野中、大山)の5泊5日の韓国旅行がはじまった。22日17時出帆翌朝8時半入港。一昔前の船旅である。もはやフツーの人たちはこんなとろい交通機関には見向きもしない。もし私になんとしてでもという気持ちがなかったら今度の旅はなかった。子どもたちが小さかった頃、年に一度くらい阪九フェリーで関西に出かけた。学生時代は青函連絡船で津軽海峡を何度も渡った。それらの記憶が甲板に出て風に吹かれてみると鮮やかに蘇る。なにもかも同じだ。船旅と夜汽車は旅の王様。あの退屈さと窮屈さと異次元感覚。それは今や逆説的な贅沢だと気づいて私たちは年甲斐もなくはしゃいだ。レストランで焼き肉、ビビンバッ、ユッケなどを注文して互いに箸を交差させて味わってみて、なるほど。免税店に入って品定めしてはなるほど。韓国がじわじわと近づいてくる。

朝7時起床。既に釜山港の沖合に仮停泊、目の前の影島(ヨド)の町並みは高層住宅が林立して、釜山が大都会(人口400万人)であることを如実に物語っている。港に着き、タクシーで高速バスセンターに向かう道すがら眺める釜山の街は、すすけた感じで市内到るところ路上駐車が目につき、広い道路も交通渋滞で混雑していた。

私たちがバスセンターで食料を買い込み、光州行きのバスに乗りこんだのが10時過ぎ。バスは季節柄か殺風景な山間を5時間も走って漸く目的地に着いた。3時。寒い。とりあえずタクシーでホテルへ。

夕食は、めちゃくちゃに乱暴な運転の市内バスに乗って、下町の自然食レストランへ。バイキング方式でいろいろつまんでみたが、やっぱり、か、辛い。食い終わって外出ると雪。本格的な雪だ。さぶい。見兼ねた野中さんがシックなマフラーを貸してくれる。うー… あったか。これは初雪だそうだ。

ホテルに戻って、広いオンドル部屋で気脈の会のミーティング。始まったのが10時頃だったので、皆もう疲れてしまっていてひととおり自己紹介を終えたら、どんな話題でも乗れない感じになってしまっていて、とても「日本の気功はこれでいいのか」なんて言い出せない。でも、各地の報告はもう少し会として取り組んでいることや、実際上の問題を前もってチャート形式にまとめるなどの工夫が必要だと思った。ただ

の親睦も悪くはないが、いきのいい奴が四五人いないとつまんないのでね。

吉田先生が、津村氏がこのところ熱中していることがどんなに気功に深く係わっているのか、本人に語ってもらいたいと思っていたのだけれど、奥さんが重い風邪で、ご当人も健康がすぐないのでキャンセルすることになって残念、と報告。そういうえば彼は去年も同じ様な理由で欠席だった。奥さんことは仕方ないが、自分の健康管理は、気功家の最低の仕事じゃないか。無理をしないというのも気功を嗜む者の基本だ。津村氏は、気功をしていないと告白しているようなものだ、と言われちゃうんじゃないかな。それで、私も残念に思った。

オンドル部屋は、つまり床暖房で、その床に寝転がって休むわけだから背中が温かい。しかし、私は電気カーペットや電気シーツの愛用者ではないので、ちょっとかなわない。私には熱すぎた。同じ感想があと2晩続く。札幌の熊谷さんと川崎の関さんが遅くなても部屋に帰ってこない。さては夜の街にくり出したな、と思っていたらさにあらず。上の階の部屋で話し込んで戻ってみたら鍵がかかっていて入れず、仕方なく部屋の片隅でうたた寝してただと。自分の部屋なんだからドンドン叩けばいいものを。

24日。朝食のあと、雪景色の中、練功。バスで光州から約40キロ西にある雲住寺(ウツヅサ)へ観気。寒気一向に衰えず、皆背を丸めて参觀。かつては千仏山と呼ばれ、本殿に到る道の両側には大小の石仏、石塔が立ち並んでいる。他の寺院とは全く違う氣を湛えていることが皆さんならすぐ分かるでしょう、とホストの梁東春(ヤンドンスン)さんがバスの中で案内してくれたが、確かにごてごてしたところが全く見られず、気は優しい。また矜持を感じさせるのに威勢はしっかり抑え込んである。ここは尼寺で、本尊の御前で読経する尼さんの節まわしは御詠歌のようで、うっとり聞き惚れた。

途中、和順(ホアソン)の町で昼飯。食卓一杯に敷き詰められた皿に色とりどりの料理。宮廷料理の給仕の仕方だそうで味も品があって美味。しかしやっぱり辛い。三上さんとこのりんちゃん(42)はもはや辛さに懲りて全く箸をつけない。分かる。韓国の子供たちはいかに?聞けば幼少の頃より手抜きなし、と。これで私たち向きに抑えてあるんだと。彼らにとっての正常は我々にとっての異常としかいいようがない。

山の中腹に鮮やかにかかる虹に拍手をしたりしながら金在哲さんの村に到着。何人かの自然学校の同志とおぼしき人たちの出迎えを受け、いよいよ交流が始まる。

## 9. 自然学校

自然学校。できあがったいきさつも、集まった顔ぶれも、彼らが目標とする理想も私は詳しいことは何も知らない。しかし、彼らは、日本の気功の愛好者の物の考え方や生き方に何がしかの共感と関心を抱き、ありがたいことに関西気功協会とのこれま

でのつきあいでこのたびの訪問者が信頼に足る人たちであるという前提で、全国各地から集まってきた。彼らは、自分たちが集まるときは主客の別がない、今回初めて客としてあなたがたをもてなすんだ、とまるで初体験を楽しんでいる口ぶりである。彼らの中で最年長は、すっかり白髪ではあるが47歳の韓元植(ハヌォンシク)さんで、多くは35~7歳の青年団である。その中の幾人かは15年前の光州「事件」の当事者で、絶余曲折を経て文字通り大地に根を下ろし、農民となった。農民となつたが、農作物を都市民に供給はしない。生産量は、基本的に食糧の自給自足に見合うだけで、生活に必要な物資を購入する現金を得るために、別途養蜂、健康食品の生産販売などを手がけている。人によっては洋服を仕立てたり、翻訳をしたり、建築業に携わったりして最低限度の生活に足るだけの糊口を稼ぐ。要するに彼らは根が自由人なのだ。自由人がコスモポリタンになるのに特別な手間暇はかかるないものだ。身も心も自然でありたいと願う遊びと学びの心と、「大気功」の精神が響き合い、お互いに尊敬し合うからこそ交流するのだと彼らは言う。彼らは自分たちの生き方がマイナーだと思っていないわけはないが、確信と誇りを持っているし、何より自然と自然な生き方を愛する人々を田舎に誘い込もうとするエネルギーを持っている。今、自然学校に共鳴する同志の数は、200を越えたという。

翌日の宿となった梁東春さんのお宅の濡れ縁の欄間に、彼の、また彼らの亡き師である張壹淳(チャソルソン)先生の筆になる額が懸かっている。『我獨異於人而貴食母』(我ひとり人と異なり食母を貴ぶ—老子二十章) 食母は乳母(ば)のことだが、母なる自然と解してもいいし、自分を育てくれたのについ忘れてしまいがちな陰なる存在と解してもいい。また繁栄する都市にたいして今は寂れている田舎と解するのも一興である。私は、自然学校の人たちの厳しさと優しさを連想して心が和んだ。

## 10. 鳴り物入りの大交流会

自然学校の人たちの大酒飲みと大騒ぎと夜更かしという前評判は、多少といわず年かさの私たち一行をかなりびびらせていた。とにかく大騒ぎには気押されしないようとの配慮?から、京都の高木光介さんと福村租牛さんの軍楽隊(ふえ、ねいこ、バケツ、ギター)をあらかじめ配属。それにプラスぶんちゃん(三上敏視さん=札幌)のアボリジニ・スーパー・オーボエ(2台近くの枯れた木の枝をくりぬいただけの、ディジュリドゥという名前の楽器。超低音の法螺貝のような音が出る)で対抗しちまおうって魂胆だ。これでわが日本部隊も意気上がり、宴は盛り上がった。なにせ、テキはサムルノリの鳴り物だから。歌って踊って、また歌って踊って。24日の晩は金さん宅のオンドル部屋と庭先でダブルヘッダー。25日の晩は梁さんの村を流れる川原でファイアストームを囲んで。

彼らは私たちを歓迎する意味を込めて、ファイアストームを囲んで大きな円陣を組み、声を揃えて「統一の歌」をうたってくれた。お返しに私たち日本人も声を揃えて、ということは心を合わせて、何か歌をうたうことになった。何を…? 何の歌がこの場に最もふさわしいだろうか…。吉田先生、つい最近まで小学校の先生をやっていた野中さん、関西氣功協会のスタッフらがにわか鳩首会談…こんなことに一体何分かかるんだ…な、長い…。そしてようやく決まった歌は、「きょうの日はさようなら」。この歌は1970年前後のフォークソングブームの中でちょっと流行った歌だ。悪い歌じゃないけど「統一の歌」とはつりあわないよな。でも、私たちにはつりあいそうな歌がないんだよ。民族の心、意思を表現する歌を私たちは持っていない。私は少し気まずい感じがしたが、そのことがわかって良かったと思った。

それと、彼らがパンソリやサムルノリなどの伝統芸能と生活意識が密着しているのに対して、私たちはそれをせいぜい趣味としてしか扱っていない。いわば伝統から孤立している。これも、問題だな。

もし光介さんと租牛さんとぶんちゃんが来てくれなかったら私たちは全滅だったんじゃないかな、などと思いつつ、私はストームを離れ、暗い夜道をほろ酔い加減で鼻唄をうたいながらひとりで梁さん宅に戻った。年に一度くらいは羽目を外して騒がなくちゃ人間がつまらなくなっちゃうなぁと反省して? 床につく。楽しかった。来た甲斐があった。

### 11. 釜山の街

26日早晩、福岡の4人組は梁さん、鄭さん、趙さん、それに早起きの何人かの日本人に見送られて朝もやのなか、和順の田舎を後にした。釜山を少しうろついてみよう



と思っていたので、早めのバスを予約しておいたのだ。

釜山には昼過ぎに着き、地下鉄に乗ったりして、ひとまず下町の龍頭山(ヨンドゥサン)公園に行った。500年前、豊臣秀吉の侵略軍を粉碎した水軍の英雄李舜臣(イソンシ)の銅像のある公園である。ここで日本語を巧みに操る40がらみの変な奴にまわりつかれた。秀吉の侵略のときのことをいろいろまくして、明治の朝鮮蔑視政策のあれこれを知っているか、と囁きついてくる。こいつ、目的は何なんだ? 多分彼にとってアンラッキーだったことには、彼の出してきた「クイズ」に私は殆ど正解を出したのである。逆に熊本のボシタ祭りを知ってるか、あれは(加藤清正公は朝鮮を)ほろボシタのなまりで、20年ほど前問題になってボシタの掛け声は禁止になったんだぞ、とか聞いてみた。彼は知らなかったが、そんなことはどうでもいいことのようだった。彼は、この公園にやって来るノーテンキな日本人観光客に議論をふっかけて、日本人の無知と差別意識を非難し、恥じ入らせるのをシゴトにしているに相違なかった。

釜山では、タクシーの運転手が日本語を話した。夏のユニバシアードのとき福岡に行ったそうだ。野球が好きで、テレビで巨人の落合を応援している。地下鉄に乗ったら中年の女性が私たちの日本語の会話を聞いて、行き先のアドバイスをしてくれた。国際市場(グローバルマーケット)の、大山さんがトランクを買ったカバン屋さんの若い店員は、日本語がペラペラだった。チャガルチ市場では、福岡に住んでいたというハルモニ(おばさん)が話しかけてきて買い物を助けてくれた。一衣帶水の釜山だからとはいえ、正直、こんなに日本語を話す人がいるとは思わなかった。彼らは“日帝36年”で強制的に教えこまれた日本語ではなく、自分からすんで学んだ日本語を話している。最近は、博多の町でも韓国からの観光客が目につく。私たちに接してくれたように彼らに話しかけられるようにならなくちゃいけない。ここでも私たちは遅れをとっているなあと思わずいられなかった。

国際市場周辺の人出には圧倒された。正月の太宰府天満宮並みだ。東西南北どの路地もびっしり。国道をはさんで港に近いチャガルチ市場も日曜だというのにごったがえしていて、大衆の活気は今の日本人が忘れてしまったものだ。

それは、自然学校の同志諸君の活気と通底しているように感じられ、世紀末だのノストラダムスだのハルマゲドンだと暗い未来にそそられている日本人の半腐れ状態と好対一をなしている。「統一の歌」をうたったあとで、あと5年以内に統一が実現すると思う人々と聞いたら殆ど人が勢いよく手を上げた彼らの将来に対するポジティブな感覚を目の当たりにして、私は彼らがきっと、早晚日本を追い抜くに違いないと思ったものである。帰って来てから目についたのが、テレビのCMに登場したサムソン。言わずもがな、韓国の最大手家電メーカーである。それが、ビデオ、パソコンなどの市場に参入。チョー・ヨンピルがかつて越えた海峡を、20年後の今年サムソンが

越えた。第二波というやつかな。

## 12. 海峡を越えて

同じその海峡を同じ向きに渡って帰る。どうもこれは、仕組まれていたみたいだと今更ながら思う。

帰りの船旅も、快適だった。韓国の3日間が実り多かったことで、4人の話も弾んだ。30年近く前、ヨーロッパに行くとき、私はシベリア鉄道で大陸を横断しようと手配したもののがポーランドの通過ビザが取れずに断念した経験がある。外国に行くのに飛行機で気軽に手軽に行くのもよいかもしれないが、昔の人が気負い込んで行ったように時間をかけて辿り着くような旅もいい。韓国は近くて遠い国。その遠さをこの船旅が象徴しているようでもあり、快い眠りが縮めてくれたようでもある。

船は闇夜をぬって南下し、1時間後には右舷に対馬のあかりが眺められた。こうこうと輝くいくつもの漁火にまるで照らされるように船は進み、日本に近づいていく。この路は、50年前、戦争に敗れた日本人が、植民地満州、朝鮮から命辛々撤収してきて安堵の息をついた最後の旅程。

1983年、まだ気功に出会う前、私は毎週金曜日の晩、仕事の帰りに、博多駅近くの民団の韓国語の教室に通っていた。熱心に勉強していたのに、何回か行きそびれるうちに、すっかり足が遠のき、言葉も忘れてしまっていたが、不思議なことに結構思い出して、少しは役に立ったりした。金ソセソニム、カムサハニダ。あなたのおかげでやっぱり近いことがわかった。ああほんとに近くて遠い国だよ。

吉田先生、ありがとう。私は、海峡を越えることができた。友だちができた。釜山往復2万円。福岡に住んでいて、ラッキーだ。私の日韓友好が、漸く始まった。かけがえのない全羅道の3日間をともに過ごした自然学校の皆さん、ありがとう。気脈の会の皆さん、ありがとう。そして福岡の3人、同伴ありがとう。

帰って来て間もなく、映画が来ているのを思い出し、観に行った。たった60席の劇場で夜2回だけ上映されていた。三国連太郎主演の『三たびの海峡』（神山征二郎監督脚本、帚木蓬生原作）である。戦争中に強制連行されて筑豊炭鉱で働かされ、脱走し、恋をし、海峡を渡り、50年後の今日、三たび海峡を渡り、ケリをつけて死んでしまう韓国人の男の物語で、これがなんと初めての日韓合作映画なのである。韓国で試写会が中止になったという不思議な因縁のついた作品もある。関心のある方は、必見。

主人公の青年時代を演じている李鐘功が、なんとスピョクチギの鄭さんとそっくりであきれちゃった。つまり、このたびの旅は、何重にも折り畳まれて実現していたのでありました。これは、もちろん偶然なんかではない。そう、つくづく思った。

# 毒のまわった共産中国にて

すいません、読んでもらいたいというわけでもないので、わざと読みにくい細かい字で書かせてもらいました。

山部 嘉彦

## — やっぱり書いておくべきこと

元は、といえば「主義者」だからか、抑圧だとか、差別だとか、特権だとか、搾取だとかいう実態を目のあたりにすると、心が騒ぐ。どこが社会主義だい、だなんて、誰に議論をふっかけるでもないのに吹きかけては口籠もある。私が初めて中国を訪れたのは1988年秋、8年前だ。その2年後の1990年から毎年観光旅行と銘打って中国に出掛けしてきた。88年と90年の印象の底にあるものは同じものだ。一言でいえば、中華人民共和国の清貧。若さと暗さが同居していた。しかしけして悪い印象はなかった。しかし、この2~3年の変わりようはどうだ。とても喜べないドラスティックな、弱肉強食の世界への転落。社会主義は地に落ちた、というべきか。つまり、90年頃までは私たち異邦人には隠れて見えにくかった中国社会の内部矛盾としての抑圧だとか、差別だとか、特権だとか、搾取だとかいうものが、今や公然と露出してきている。中国にも多くの心ある「善良」な人々がいて、この大きな時代の節目をあるいは苦々しく、あるいは悲しみに満ちた思いで、迎えているに違いないのだが、それらの人々の声は、聞こえてこない。そのかわり、生き抜くための貪りの叫びが聞こえてくるようになった。そういう時代の節目に立ち会っているのだから、いくつかの象徴的な小話は、やっぱり書いておくべきことではないかと思うのである。

## — どうしてそんなに高いのか

『毎日旅行』のチラシに、何と「黄山5泊6日13万円」とある。今年の春のことである。王老師と企画の打合せが始まっていた。老師の中国国内の旅費総額の提示額は一人当たり一日1万円を大きく上回っていた。はっきり言って日本国内の旅行の方が割安である。どうひっくり返っても13万ではできない。件のパック旅行は、国際航空運賃が半額程度にダンピングされているという噂だが、老師の提示額に半額の飛行機代をのせても、13万を越えてしまうのだ。老師の中国国内の旅費総額の提示額は年々高くなり、割高感が募ってきた。これは別に、老師が法外なりベートを取っているからなのではない。老師が契約依頼している旅行社がふっかけてくるからなのだ。

生来貧乏性の私は、省けるものは省きたい。食事だって毎日御馳走では辟易する。観光地をたらい回しされるのもげんなりだ。日頃忙しいせい旅行中はボーッとしている時間がせめて1時間ぐらいはほしい。こんなささやかな願いが、今度の黄山旅行では叶えられなかった。旅行会社の勝手な引き回しのために。だから高くなっちゃうんだよ。

よほど鈍い私も、からくりが読めてきた。今や海外からの観光客を扱う旅行会社は、日毎のメニューにしっかりとリベートが入ってくるゼイタクを必ず嵌め込むことによって荒稼ぎせざるを得ないほど、インフレの中で喘いでいることが。「ちょっとゼイタク」が数年前まで安かった。こんな値段でいいんですか、悪いなぁ。そんなことがしばしばあった。それがまあ中国旅行のうま味だった。つまり、もううま味がない。なくなってしまったといってよい。なくなっただけならいい。代わりにいや味が嵌まった。

上海到着直後の夕食（機内食が6時半、夕食が9時半。要らん、というのにセット）。北海賓館2泊の予定が頼まないに徒步15分の西海賓館に移動（西海賓館の方が5割高。部屋は狭く、眺めも悪く、風呂は泥水。全く無意味）。上海では外灘（ワカツ=バンド）とショッピングだけでいいと言っておいたのに90元もする上海タワーに昇らされ、頼みもしない上海蟹料理（300元／kg?）、そして★★★★の建国飯店泊。即ち私たちはカモであったのだ。

## — 値切るのは疲れる

一昨年、評判の悪かった外国人専用の兌換紙幣が廃止され、人民幣に一元化された。それは、自由市場経済の本格的開始の象徴的ひとコマだった。ものの値段はその時その場の需要と供給のバランスで決めていいことになった。定価というものがなくなったのだ。言い換えると、勝手に値上げしても、その値段で買い手がOKすれば売

\* 100元=1350円、ちなみに黄山の駕籠人夫の月給は、400元。5年前の倍だが、これだけではやっていけない。

っていい。そうと分かれば商品は軒並み値上げとなる。値札は高くしておくに限る。買い手からすると、いくらなんでもソリヤ高いよ、という値段にしておいて、じゃお客様、おいくらならお求めになりますんで…となる。

今回は、行く先々で値段の交渉をしなければならなかった。慣れていないのだから、高い買い物をしてしまった人も多い。なかには、値切ること自体が嫌で、言い値で買っている人もいた。黄山で80元の酒が、上海のスーパーで42元で売っていたのでバスを待たせて買っていたのは大山さん。分かるよ。こんなこと也有った。屯渓からバスで黄山に向かう途中立ち寄った店で、中さんは骨董品のコーナーで年配の店員がしていたループタイの亀の形をした石に魅せられ、譲ってもらえないかと持ち掛けた交渉に及び5000円で手を打ち、ホクホク顔だった。彼はいま、亀に凝っているのだ。店員が最初に吹っ掛けた値段は20,000円、彼の交渉の腕はたいしたものだ、とギャラリーは感心したものである。ところが黄山に登ってから岡本さんがわずか50元で見つけてきたのは紛れもなく中さんが5000円で手にいれた亀形石だった。例の店員は、最初に原価の40倍の値段をつけた訳である。こうして4400円もの差益を稼いだ店員を私たちはお見事！と言うべきなのか。私が言っておきたいのは、5年前にはそんな商売をする人はいなかったということだ。と断言せずとも、私たちは「異文化」に直面して戸惑ったり、途方にくれたりしたのである。

### — 駕籠の値段は高いか安いか —

黄山にはポーターがいて、荷物は安い手賃で運んでくれる、という話は聞き及んでいたが、いっぺんに何十個も頼めるとは限らないから荷物はリュックにまとめるように。キャスター付きのハードケースはダメ！と言っておいたのに持ってきて、ロープウェーには載せられませんと断られて。さて、上に上がってみて驚かされたことの一つは、観光客に群がる若いポーター=駕籠かき人大の多さ。

ロープウェーの駅からホテルまで徒歩10分の道のり(下り)に駕籠を雇うと100元。プラスα即ちチップが20元ほど。荷物は1個20元。日本円に換算すると安いかなという程度の小僧い値段である。もしタクシーが走っていたら、日本の値段と比べてさえ高い。

物珍しさもあって、観光地だし、何事も体験、と長老3羽鳥(高丘、山内、楠原)が試乗。

しかし、どうもこのチップというのが気になる。翌日懸念は的中した。西海賓館に移って、午後から日の入りを見に往復3時間程の峰まで行くことになり、3羽鳥はまた駕籠を雇うこととした。今度は拘束時間が長いということで、400元だという。5,400円だ。日本感覚でも安くはない。それにチップが要る。よし、チップは会の会計で面倒みよう、とにかくみんな一緒に行こうじゃないか。ガイドの王さんに相場はどんなものか聞いてみると。50でどう？定価の1割強、常識的な額だ。それに対して、ちょっと足りないかな、という答え。私は、じゃあ一人70、3台でで200、てここでいいなと皮算用。そして戻ってきて、皆さん御苦労さん、3台まとめて200元、チップです。と差し出したら皆の目付きが違う。バカヤロ、どれだけ汗かかれたと思うか、一人頭35だなんて舐めるな、とこうだ。結局定価の2割を越すチップを払う。要求されるチップはもうチップとは言えない。私は不愉快になった。

どうしてこんなことになったのかというと、定価の400は、駕籠かきの収入と全く無関係に当局の懐に入り、彼らには何人の客を取ろうと月給400しか貰えない。そして400じゃ暮らしていくのだ。チップは彼らにとって小遣いなんかではなく、全くことのできない副収入なのだった。だから客に群がる。400じゃ暮らしていくことぐらい、当局は当然知っている。知っていて給料は上げない。おまえらチップ貰っとろうもん、ええのう、とか言っちゃって昇給要求にはシカトだ。こーゆーのを搾取って言うんじゃなかったのかい？ 駕籠かきは厳しい肉体労働だから、1か月交替の出稼ぎ制だそうだ。山麓の町の青年たちの貴重な現金収入源だという。チップ収入が1日50とすると月1500になる。20だって600になり、給料と合わせると1000の大台にのる。

のったって、円に換算すればたった13,500円。月収である。約20分の1の所得水準である。なのに物価の水準は3分の1程度の感覚なのである。まあ、外国人観光客は庶民の2～3倍の金を出して同じものを買っているに



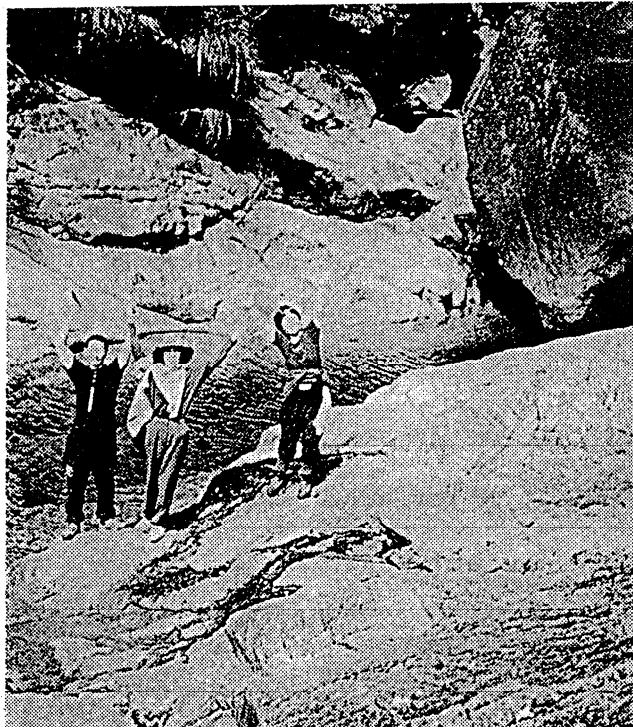
違いないが、そうだとしても相当厳しい生活設計を強いられていると想像できる。食材は贅沢をいわなければ安く手に入るから、生きてはいけるのだろうが…。昔の日本がそうだったように、みんな貧しかった時代は心は豊かだった。今のインドにはその貧しい安定がある。彼らは面と向かって「日本人はものは豊かだが心は貧しい」と言う。が今の中国人はそれが言えなくなっている。心がさもしくなっちゃっているのだ。もちろん、特権階級の奴らの範取りのせいだ。

### — 特権階級の特権行使のしわ寄せ

特権階級は到るところにいる。かつて少国民が到るところにいたように。王渙生老師の最初のスケジュールプランでは、上海-黄山は往復とも飛行機だった。それが出発間際になって、帰りは夜汽車になりそうだと言ってきた。行ってみると、1等寝台は取れず、2等寝台しか…と言う。が、ガイドの王さんに問い合わせると、実はそれも厳しくて、バスで9時間かけて上海に戻る線が濃厚だ、今のところ90%バスだ、と。翌日のことなのにまだそんなこと言ってる。どうしてそんなことになっているかといえば、ツルの一聲?で10月5日は黄山-上海便のフライトがなくなったからなのである。理由は不明。突然決定通知があるだけだから。想像すると、飛ぶ予定の飛行機をどこかの臨時便に使うことにしたからなのだ。臨時便に乗る奴は、特権階級関連である。違うかもしれないが、日頃それが罷り通っているから、想像してしまうことになる。だって、1等寝台がダメになったのは、ツルの一聲だったからであることが、夜汽車に乗ってからわかっちゃったのだもの。

黄山で、日本人の団体とはちあわせた。ホテルまで一緒だった。聞いてみると、関西からの招待客だという。黄山市と彼らの市が姉妹都市だそうで、しっかりとてなされている様子だった。しかし、黄山市人民政府でさえも、飛ばなくなった飛行機を飛ばすことはできなかった。が、私たちが予約していた1等寝台を横取りすることはできた。10月4日、乗車するその日になって、2等寝台が辛うじて取れた、ウチの社長がじきじきにねじ込んで、やっとのことで確保できた、と王さんはホッとした顔で御注進に及ぶ。1等車も4席だけ取れました、と。

私はなぜかそうなることが(直観的に)わかっていたので、嬉しくも何ともなかつたが、王さんでかした、とねぎらつた。しかし、旅行社の社長は、満席の中どうやって、席を取ることができたのだろうか。社長ももっと弱い誰かを押し退けて、2等寝台を横取りしたのかもしれない。説明はやめよう、とにかく乗れたのだ。朝、朝食を、食堂車を貸しきっていただいた。なかなかリッチで、皆満足そう。終わって、ぞろぞろと自分たちの車両に戻っていく途中、1等寝台のコンパートメントのドアを開けて出てきた人の顔。それは、黄山ではちあわせた団体の添乗員だったのだ。



帰ってからこの話を江上さんになると、実は数年前、日中青年団として黄山を行ったとき、自分たちが、横取り、横入りのゴーマン旅行団になってしまっていて、横入りされた庶民の冷やかな視線を浴びてたまらなかつた、ありゃダメになりますよ、何か友好ですかって、ねえ。と。

特権社会には、おこぼれとか役得とかコネがついてまわる。特権が強大であればあるほど、庶民の次元でも日常的にその煽りを食う。昨今、選挙でかまびすしかった日本も、そういう時に根っここのところで特権社会であることを思い知らされるが、とても中国には及ばない。こりゃダメになりますよ。私の心は、江上さんの心とハモる。

### — お国自慢の感性

バスで9時間、と聞いてええーっと驚いた私たちは夜汽車で15時間もかけて、上海に着いた。鉄路は黄山から北上し、未明に南京を経て、長江に沿うように鎮江、常州、無錫、蘇州と東下する大迂回の末、上海に到着したのである。やれやれ。

上海站(えき)前には、いました。流民の群れ。このやばったさはさしづめ上野ってと

こだな。

出迎えたガイドの魏さん(中年の女性)は、もちろん国の暗部には絶対触れない。聞くと、それよりも、とはぐらかす。教育が行き届いているようだ。魏さん、というより中国人の自慢は、上海が発展途上の世界都市である、ということのようであった。断ったのに無理やり昇らせられた上海タワーは、東京タワーをはるかに凌ぐ世界一の高さです！と。あっそう。べつに。という反応をものともせず、彼女はまくしたてる。

バスの中で待っていられないというので、私も下りてゲートに向かう。すると、制服の門衛が私のトレードマークである「八つ割り」という履物に目を付け、入門籠りならぬ、と言う。私はもともと昇る気がなかったのであっそう、こっちも結構ですよ、と喜んで踵を返えそうになると、王滻生老師と中さんが、その門衛に向かって猛然と抗議を開始した。どうしてこの外国のお客さんの伝統的な履物がいけないというんだ？？ハダシだ？？どこがハダシなんだよ？？と、凄い剣幕。あの柔軟な王老師と中さんが。初めて見た。門衛はたじたじとなり、いいです、分かりました、入ってください、と。この間約3分。ささやかなことではあったけれど、私は二人の誠心を感じて、心が熱くなった。ありがとう。でも、私は××の高上がりは御免、王老師、田村さん、田中さんと下でゆっくり窓いで待っていた。中国10年選手の中さんも初めて昇って降りてきて、たいしたことなかった、と言った。わかりきったことを。まあ、名物にうまいものなし、の類か。

バスは川向こうの広大な敷地に林立する建設中の高層ビルの中を縫うように走り、全長8キロにおよぶ大橋がいかに優れた設計と技術によって完成したかを聞かされながら渡る。そして、市内は4時までは偶数ナンバーの車は入れないんだったとか言いながら途方もなく大回りして、ショッピングセンターに向かうでした。

タワーから降りてバスに向かう道すがら、中さんに上海のこの建築ラッシュについて水を向けると、かなりハッキリと「危ない」と言う。中さんは（私と違って）、批判めいたことはめったに口にしないのだが、中国のことを心から思って、言うときは言う。危ない、という意味は、器だけ莫大な金を投資して作っても、中身を詰めることができずに大崩壊してしまう危険性がある、取り返しのつかない負債を抱え込んで、国を売り渡してしまわざるを得ないような、危なさ。人々がまだとても貧しくて、喘いでいるのに、器だけは超最先端を追求したがる感性。こういうのを浮かれている、というのではないだろうか。世界中どこを探しても、物質文明の繁栄を見つけることができない時代に私たち生きている。物質文明自体が黄昏を迎えてるというのに、どうして中国だけがその繁栄を作り出せるのだろう。川向こうのニュー上海の完成は20～30年後だという。

### — 買い物狂、それは反動？本性？

タワーの後、2軒でショッピングをしてから高級レストランで晚餐会。このときまでに、もう随分買い物はしたはずなのに、晚餐のあと、さ、外灘に行こう、早く行こう！と私が立ち上がっているというのに、一体誰でしょう、これ（壁にすらりと並んでいる掛け軸の一つ）いくら？と聞いたのをきっかけに、晚餐会は競売場と化した。もう止まらない、そして20分。それからライトアップされて輝く外灘に着いたのは、公園のバス駐車場が閉まる時で、バスがUターンするちょっとの間の散歩でお茶を濁すはめになった。しかたない。また、ゆっくりいらっしゃいってことだろ。私たちは、満足してホテルに向かった。

それでも、あの買い物狂ぶりはどうだ。中さんが、閉闇合宿で心洗われたはずの皆さんか、帰りがけの友谊商店でお土産を買いあさる姿を見て、いったいどうして？と思う、と言ってたことを思い出す。あんまり皆がどかどか買うので喜んだ店の人が、王老師に揉み手ニコニコで耳打ちして、まことにどうも…お礼といつてはですが、1本お好きなものをお選びください、と（以上、想像）。王老師は私の所にやって来て、山部、気に入ったものがあったらどれでも…と言う。日本円で2万円もするのがすらりなんだよ、それにリベートがわりにどうぞ、だって。私は皮肉っぽく聞こえたかもしれないが、精神的に満足しているのでもう何も欲しくありません、と言って断った。それでも王老師は、ご自分で選んで後から私にお土産に、ど1本下さったのである。

公募で団を組むと、お互い全員気心知れた仲とはいかない。年齢の差も大きいし、暮らし向きも趣向も人さまざまである。金銭感覚も違う。それゆえ、時として見慣れぬ振る舞いにあきれさせられたり、驚かされたりする。

私も買い物はするが、いわゆるお土産は買わない。これまでには、小物入れだと爪切りだと小銭入れなど、喜ぶかどうかわからないけどその模様がいかにもチャイナって感じのものを買った。しかし、そのときはアリガトと言って受け取りながら愛用してもらったためしがない。結果的に買った私の自己満足ということだ。それから、これはいいと思って自分のために買ったものが、自宅に戻って開いて改めて見てみるとなんとも陳腐なド安物でしかなかった経験もある。損をしたと思うほどの失敗はなかったが、まあ小規模の安物買い物の錢失いではあった。私は基本的にカネがない（低所得だ）から、買えないで買わないのだが、買う気にならないので買わないのと合致したときは買わないで済むが、ひょいに稀に、買いたいのにカネがないときがある。そういうときは私はアクロバットしてでも買う。不思議と天の？助けもある。今回は、買いたくなるのがなくて良かった。

老婆心ながら、中国での買い物は、行く前から買うと決めていた物以外は、品定め、目利きを目標に、断固として見るだけにした方が無難だ。今回は特にそう思った。とにかく高い。値札はあってなきがごとし、値の張る

ものはもとより、小間物の類まで2～3年前の倍の値段がザラなのである。今でも、中国では、同じもの(例えば参觀入場料、ホテルの宿泊料)は二重価格で、もちろん外国人は高い。たいてい倍だ。公定料金が倍なんだから、他のものでも、外国人向けのものなら巷間の値段の倍ぐらいええやんか、というノリなのである。そしてその上インフレで、かつ上海価格なのだ。それでも円換算するとそんなに高くないじゃん、と思ってしまえば、財布のヒモは緩む。しかし、必需品以外の結構なお買い物は、まず例外なく、抑制の反動か過剰エネルギーの鬱散と知るべきである。

### 一本音で語り合える ときが来るまで

この5年間、6回にわたる観気旅行を通じて、少なくとも私は「王老師でさえここまでしか『中国』から抜け出せていない」と感じることがしばしばあった。私のスタンスが『日系コスマポリタン』、つまり、日本人であることに自覺的でありながら、宇宙的(コモリカ)感性と言語様式で生きること、であるので特にそう感じるのだと思う。中国人は建前と本音が全然違う、とか身内と「他人」では扱いに天地ほどの差がある、などという。それもあるけど、私は中国人の、勿体を付ける付き合い様式、高級であれば客は喜ぶ、喜ばせられなかつたとしても手抜かりはない、と考える固く安易な接客思想には正直うんざりなんである。

ウラを返せば、相当なインテリであり、国家思想=エセ共産主義から程遠い自分独自の人間觀を持っているはずの国際派の氣功家である焦国瑞、周穎豐、王渢生老師といえども、自身の内面を巢食う高級指向を止揚していないということではないのか。焦、周両老師はともかく、質素な服装、所持品の王渢生老師が、私が何度もくどいほど食事はもっと軽くしてくれ、品数も半分でいいと申し入れても改善できない。帰りの寝台も、2等で結構大丈夫と言って、皆に手を上げさせて不満に思っている人がいないことを示してもなお失礼なことになってしまった申し訳ない、としきりに恐縮する。去年のモンゴルだって、「豪華モンゴルバオ」=円筒型コンクリート製ツインルームロッジを、せっかくここまで来て、本物のバオ(モゴルトーゲル)に泊まれないなんて、と不満を言うと、待遇を良くしようというのにこの日本人はどうだ、不可解…と吐露した老師を思い出す。

王老師は、氣功の技術上のまたは知識上の師ではない。「精進の師」である。だから私も全面的にお付き合いする。それに老師はソ連留学の経験を持つ国際人だ。私は国際人として付き合いたくて、こんなことを書いているのである。私はこれまで外国人と結構付き合ってきたが、相手が私が風変わりな自由人であることをよく知っていたためかこちらの言い分はストレートに通じた。王老師だって、私の独特的の風体から察して、こいつは言うことと思っていることは一緒なんだ、と分からぬはずがないのに、鶴呑みにできない。本音で付き合うのにはまだもう少し時間が必要なのだろうか。もしかすると、分かっているけど、旅行の仕組みとしてその枠の中ではどうしても山部の言い分は通せない、そういう制約が厳然としてある、のかもしれないではあるけれど。

来年の春4月には、王渢生老師を福岡にお招きすることが決まっている。王老師がまだ脱ぎ捨てられない中国人特有の事大主義を、この半年の間に何とかしたいものだと私は密かに思っているところなのである。昔むかしフェミニストのあるイギリス人女性にインタビュしたとき、彼女が日本人ってどうしてこうritual(儀式的)なのかしらね、と溜め息まじりに言ってたけど、中国人は輪をかけてritualだぞ、と今彼女に向かって言いたくなつたよ。

知ってるところ、私はゴアイサツが苦手である。いやキライなんである。この歳になって、ゴアイサツとオジギの区別ができるようになったので、いっそゴアイサツ抜きに拍車がかかってきた。そういう視座から改めて現代中国の生態を凝視してみると、向こう十年を経ずして、必ず起こる中国の大混沌を前に、私たちの日中友好の困難を改めて感じるるのである。Ω



# 龜蛇を見て来た

〔11月23日〕2年越しの念願であった、八代の妙見祭に出かけた。はじめての国内観光と気どったわけでもないが、終勢13名で、内男性は私と今崎さんのたった2名。この、女性上位の傾向はもともとわが「業界」では所を向らず強いのだが、福岡観光の会ではこの1~2年、拍車がかかっている。去年までは、何とか男性陣に盛り込



してもらおうと思ったものだが、作為を弄することはやめにした。シラ、男の時代は終ったのだ。

人数がまとまらなかつたので、特急バスに乗って行くことにしたが、前日になって是非、という人もいたので、今崎さんに無理を言って、車を出してもらい、二手に分かれて早朝出発。

まず、催主の八代神社にお参りしてからJR八代駅前へ。駅前広場はそんなに広くはないが、桟敷席が組まれてあり、祭りの行列はここで見世を張る。

私は、龜蛇が各町内からゾロゾロとくり出して、姉を競うのだと思い込んでいたので、長い

長い行列の最後尾にたった1台、と知って拍子抜けしたが、全長2kmにも及ぶこの神幸行列が、中国江南地方と近い西九州の長い伝統を象徴する一大ページェントであることが分かつて満足した。そして、龜蛇が去ったあと、お避けがあって、実はこれがお目あての人も多い、勇壮果敢な馬あしらいがいくつもくりひろげられた。花馬の奉納、と紹介され、市内の高校の同窓会やら、町内の職人組合やらが、しめ縄で飾った日本馬を追々立て、けしかけて走り出すのである。祭り好きの人は、こういうのが樂しいらしい。

行列はさらに1時間ほどかけて市内をねり歩き、八代神社に帰り、それから龜蛇と花馬は近くの川原に出て、大いにはしゃぐのだそうだ。

私たちは、八代城など市内観光を楽しみ、博物館での妙見祭の由来などの知識を仕込み、大きな樟の木の下で気功をしたりしてからまたバスに乗り、帰り着いた。

妙見祭と気功がどうつながるのか、と聞かれると、気功に龜蛇氣功というのがあるって、妙見神がその昔、楊子江に住む龜蛇に乗って海を越えてやって来たという伝説が八代に伝わっていて、…その龜蛇とは玄武であり、玄武は北面の守護神であり、妙見信仰は北辰(北極星)信仰であり…ということにすぎない。わかったことは、龜蛇は、カメとヘビであると同時にキタ(ガメ)であることである。そして江南と連っている。

福永先生に妙見祭のことをお話しすると、武漢に、長江をはさんで漢と蛇の巨岩が向い合っている名所がある、と教えて下さった。

# 亀蛇はどこから来たか

— 武漢観光旅行でひとり悦に入つて —



田長・山部嘉彦

## 亀蛇を見に行く

1995年のある日、博多駅のコンコースに熊本県八代市の観光協会が八代神社の例大祭の引き出物を飾り出して観光誘致のアピールをしているのに出くわした。その、高さ2.5メートル、尻尾の毛の長さまで含めると長さ5メートルにもなる異様な怪物は、亀蛇(がめ)と紹介されていた。亀蛇は「きだ」と読むのか!

それから1年半、96年の11月23日、12人の仲間とともに亀蛇を見に行くことになった。

この祭りは九州三大祭りの一つに数えられる由緒ある祭礼で、その昔、妙見神が亀蛇の背に乗って海を渡って八代の津にやって来たことに因むという。妙見信仰は、博多にも妙見の地名が残っているように、九州西海岸の諸都市によく見られるが、八代のこれは、もっとも盛大で、町はこの日一日祭りで明け暮れる。メインの神幸行列は前後2キロに達し、町中を練り歩く。神幸行列には西王母やミカン、ソテツなど、明らかに中国江南地方から渡来したもののが笠鉢(山車)に仕立てられて並び、その最後尾に例の巨大な亀蛇(がめ)が大騒ぎしながらついて来るのである。

伝説によると、亀蛇は揚子江(長江の下流)に住んでいて、天武天皇の白鳳九年(681)、妙見神を背に乗せ寧波からやって来たという。では妙見神とは何か。八代神社の石碑には「聖なる北極星、北斗七星の象徴なり」とある。では亀蛇とは何か。玄武すな

わち北門の守神にはかならない。

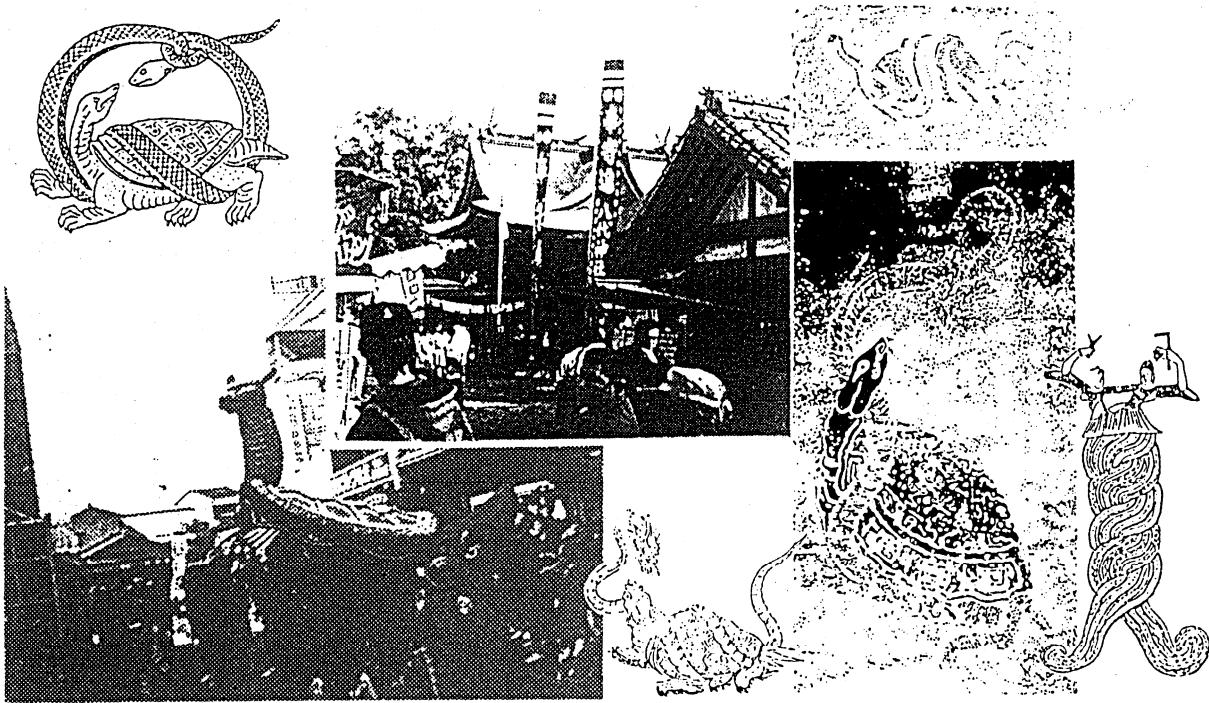
八代妙見祭を見に行ったあと、福永光司先生(中國古代宗教哲学、道教研究の第一人者。元京大東大教授)にその話をしたところ、武漢の長江をはさんだ両岸に亀山と蛇山が向かい合っていると教えてくださった。一度行って見なくちゃ、とそのとき思ったのである。

## 亀蛇とは一体か

ところで、玄武=亀蛇はどんな姿をしているか。私の手元の資料では、漢代のものが一番古く、唐代のものは写実的である。高松塚古墳の玄武は図案的な要素が見てとれる。いずれも、亀と蛇が絡みついで二体として描かれてある。

ところで、易の始祖伏羲と女媧はともに人面蛇身で向き合い、尾は絡ませて交尾している。亀と蛇にまつわる物語を辿りはじめるとピンもキリもなくなるが、北極星~北斗七星信仰と重なってくることは間違いない。そして、そのことは、亀と蛇がたむろしている長江流域が中国文明の源郷であることを示唆している。亀と蛇も伏羲と女媧も、その語るべきところのものは「二而不二」「一陰一陽」であろう。

わが八代のガメはといえば、これは亀の胴体に蛇の頭部が接合した姿である。時代を下るにつれて、こういう合体混淆の姿が一般的になるのだろう。要するに、太極なのだ。亀と蛇が一体化したとき、今



度はその化身妙見神を生み出してまた陰陽二体になったのである。

### 鷄虫蛇の古文細々 武漢

さて、武漢である。大都市ではあるけれど、観光都市とは言いがたいこの町に、どんな魅力があるだろうか。私に限って言えば、ただ長江をはさんで向き合う龜山と蛇山をこの目で見られれば満足できそうだったが、ほかの皆さんは、武漢の町に何か目標を見つけるのはむずかしかったかもしれない。

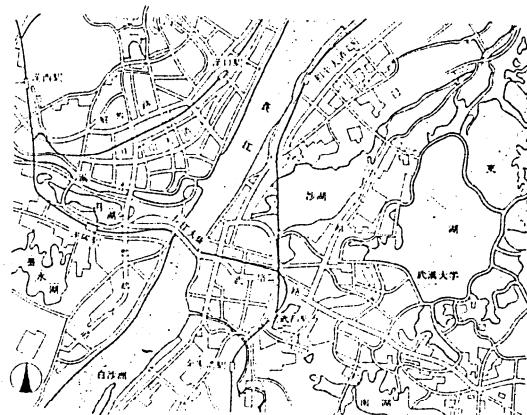
しかし、行ってみれば、得られるものは多いものである。とにかくここでは、とりあえず、私の旅を語ろう。

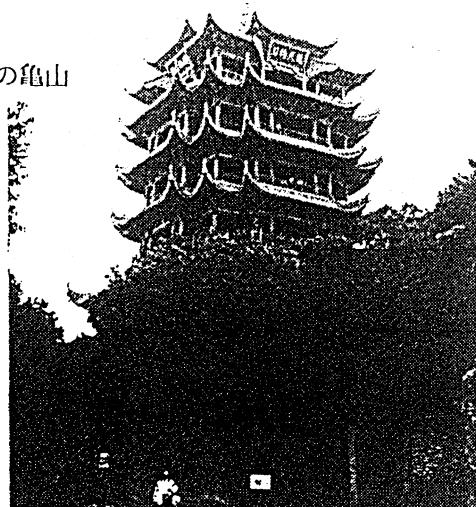
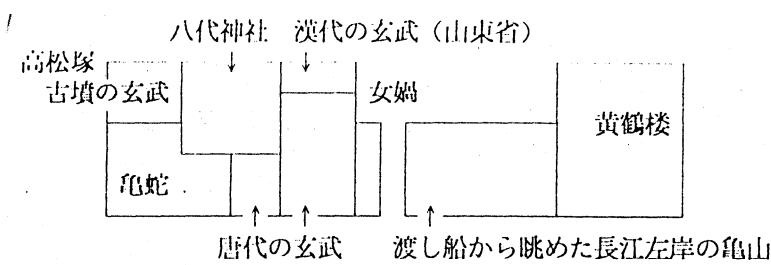
武漢は、漢口、漢陽、武昌の町から成り、武漢三鎮と呼ばれてきた長江中流域の要衝である。殷の時代から、地政学上（軍事的見地から）重視され、例の呉の孫權と魏の曹操が霸権を競い、時代を下って南宋軍は、女真の金の女真軍と戦い、次いで元のフビライと長江を隔てて戦った。近くは長江中下流域を統治した太平天国の女性軍団が、清の鎮圧軍と果敢に戦った。今は産業都市だが、東西南北の要衝であることに変わりはない。地図を見ると、北京から鄭州を経て広州、香港に至る南北のラインが上海、南京から遡上して重慶成都に至る東西のラインとクロスするところが武漢であることがわかる。武漢は中国の臍なのだ。

では、武漢の臍は？ それはもう、言わずもがな、龜山と蛇山の中間地点、すなわち長江の流れの真ん中以外ではあり得ないのである。そう思うと私は断然船で長江を渡りたくなった。

実は、かつては誰の目にもそれは明らかだったに違いないのに、40年前(1957)に長江大橋ができ、蛇山の山腹に全く無内容な黃鶴楼が再建され(1983)、対岸の龜山の山頂には高さ221mのテレビ塔が建設されてしまって(1986)、この地の風水（大地のエネルギーバランス）は今やガッタガタ状態なのである。だから、せっかく来たのにも練功する気になれなかった。いや、これほどとは思わなかった。特に、黃鶴楼がひ、ひどかった。

武漢市内図





### 長江の渡し舟合

長江大橋を渡り、蛇山の黃鶴楼に行き、亀山の建てかけの晴川閣に行ったので、王渾生老師も、ガイドの許さんも、もう船はいいだろ？と促すのに、私は「いいや、絶対乗る」と言い張って、全長40mぐらいの貧弱な渡し船に乗り込んだのであった。小雨にけぶる長江。滔々と流れる茶色に濁った寸胴の大河。幅約1.5km、所要時間15分。流れの中央で両岸をのぞく。亀山も蛇山も、残念ながら山としては見えず、テレビ塔の台座、黃鶴楼の台座でしかなかったのである。しかし、私は、川面に近い高さから両岸を見ることができ、また長江の流れを直接感じることができて、満足したのである。私だけだったみたいだけれど…。川の流れは、昔とさほど変わらず、時には—例えば去年のように、氾濫して町中でも1週間、郊外だと2~3ヶ月も水没し—猛り狂って、自分こそ主人であると人々に思い知らせる。ここ武漢は、だから紛れもなく長江の町であり、水の都なのである。

### 水の都

古地図を見ると、長江に中州ができたり消えたりまた、漢水の流路が変わったりしている。湖も、位置や大きさを時代ごとに変えていく。東湖は戦国時代(紀元前2~3世紀)にはあって、楚の懷王の重臣屈原が詩を吟じたのに因んだ「屈原行吟閣」が湖畔にある。

そう、ここは、吳、越を呑んで長江流域以南の霸者となった戦国七雄の一つ、楚の版図のど真ん中に

位置するのである。市内の湖は、東湖を筆頭に、南湖、梁子湖、后湖、后官湖、武湖、梅光湖、沙湖、墨水湖、月湖、黃龍湖、三角湖、塔子湖…と枚挙に暇がないほどである。これら大小の湖は、皆長江が氾濫して残した水たまりである。それが、北京や西安など北方の乾いた大地の都市の厳しさとは異質ののどかさ、ゆとりを感じさせる。所詮、水には適わないのだ。そういう風土に水を知り、水に任せる思想が生まれ育った。老莊思想=タオイズムである。

老子も庄子(荘周)も、長江流域で活躍した知識人である。老子は楚の苦県の人、庄子は宋の蒙の人と司馬遷は書いている。蒙は今の河南省の商丘あたりで楚の北辺に近い。中原とは異なる自然認識が育ったことは、たとえば、地に三宝ありとして儒教が天地人とするのに対して、道教は天地水とすることでも歴然とする。人は中原では偉いが、あるいは偉くありたい、天地に比肩されたいと単純に思うが、長江辺りでは事実として人はとても水には敵わないと、その生き方は、流れに逆らわず、流れを利用する生き方とならざるをえないのである。

ガイドの許さんから去年の水害の時、人々は水に浸かって完全に都市機能の麻痺した町をボートに乗っていつものように行き交ったと聞く。騒ぐな、この水もいつかは引く。待つにしくはない。今できることをすればいいじゃないか。そういう態度で人々は為政者の交代劇を観てきたわけだ。

武漢の長江とその水たまりを眺めながら、タオイズムを支持した中国人の歴史を私は思いやった。■